

令和 6 年 6 月 9 日現在

機関番号：32665

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13116

研究課題名（和文）19世紀英国、初期取材・調査型女性ジャーナリスト、イライザ・ミーティヤード研究

研究課題名（英文）Eliza Meteyard, the Nineteenth Century British Woman Journalist and Early Investigative Writer

研究代表者

閑田 朋子（KANDA, Tomoko）

日本大学・文理学部・教授

研究者番号：40328654

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,100,000 円

研究成果の概要（和文）：政治や経済に興味を示す女性に対する根強い偏見があった19世紀の英国社会において、重度の難聴を抱えた女性ジャーナリストのイライザ・ミーティヤードが、徹底した取材と調査を行いながら著作活動が続けられた理由を探究した。主な理由は、第1に性別に関係なく利用できる大英博物館の図書室等に通い大量の資料を参照できたこと、第2にユニテリアン急進派の人脈に恵まれ、彼らの出版する大衆向上雑誌に寄稿することで社会派ジャーナリストとして訓練を積めたこと、第3にユニテリアン急進派の人脈を通して、さらに広い範囲で様々な出版社や雑誌編集者や情報提供者と知り合い、ジャーナル記事の作成や寄稿のための機会を得たことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、イライザ・ミーティヤードを出版文化史・文学史に位置付け、他の英国19世紀女性作家研究に波及させるとともに、ジャーナリズム研究の一角としての社会的意義を持つものである。また、ミーティヤードを一例として男性優位の社会において女性ジャーナリストが取材に利用しえた人脈や情報源をたどることによって、ヴィクトリア朝の出版文化研究に役立つと同時に、時事問題を扱った彼女の小説は、ノン・フィクション小説の先駆的作品でもあるため、ノン・フィクション小説の歴史的研究を促すものでもある。

研究成果の概要（英文）：In mid-19th century British society, there was a strong prejudice against women who showed interest in politics and economics. However, a woman journalist, Eliza Meteyard (1816-79) pursued her writing career with thorough research, despite her severe hearing difficulty. The purpose of this study was to find out what made it possible. Her access to libraries in London, where she could consult political and economic works regardless of gender, which was exceptional for libraries of the time, her network of Unitarian radicals, and the journals of popular progress published by these radicals were indispensable to her writing activities.

研究分野：人文学

キーワード：ヴィクトリア朝 社会問題小説 ジャーナリズム イライザ・ミーティヤード ユニテリアン急進派 19世紀英文学 大衆向上雑誌

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究の学術的背景として、ヴィクトリア朝の出版文化研究、読者反応批評、マルクス主義批評、フェミニズム及びジェンダー批評があげられる。

(2) 1950年代に、ヴィクトリア朝の大衆出版文化が注目されるようになると、ミーティヤードの名は廉価な定期刊行物への寄稿者として、散見されるようになった。たとえばマーガレット・ダルジエル(Margaret Dalziel)は、当該分野の先駆的研究『100年前のポピュラー・フィクション』(*Popular Fiction 100 Years Ago*, 1957)において、ミーティヤードの短編に言及している。

(3) その後、第三次フェミニズムの兆しが現れ、マルクス主義批評の文脈において、社会問題小説がしきりにとりあげられた1980年代になると、再度、ミーティヤードの名が文学研究に見られるようになる。サリー・ミッチェルはその著書『堕ちた天使』(*The Fallen Angel*, 1981)において、ミーティヤードが、売春婦問題を率直に取り上げるなど、当時としては急進的な作家であったことを述べているし、キャスリン・グリードル(Kathryn Gleadle)は、『初期フェミニスト』(*The Early Feminists*, 1995)において、フェミニストグループの人脈のなかのミーティヤードに言及している。また、ケイ・ボードマン(Kay Boardman)は、ミーティヤードに、少女を主人公とする、女性の初頭教育をテーマとした児童文学作品があることを指摘した(“Struggling for Fame: Eliza Meteyard's Principled Career,” *Popular Victorian Women Writers*, 2004)。他の例としては、ジョウゼフ・ケストナー(Joseph Kestner)は『異議申し立てと改革』(*Protest and Reform*, 1985)において、女性労働者のオーストラリア移住を描いたミーティヤードの短編「ルーシー・ディーン」(“Lucy Dean,” 1850)を紹介している。

(4) 以上のように、文学研究が、カルチュラル・スタディーズの流れのなかで、いわゆる古典的名作だけではなく、例えば労働者詩人の詩や、三文小説家の売文行を生業とする暮らしなど、その対象を広げていった学術的背景のなかに、本研究を位置付けることができる。

2. 研究の目的

(1) 英文学研究において、当時の英国における女性の劣悪な労働環境や、海外移住、売春などの問題を扱ったミーティヤードの小説は、様々な研究に断片的に言及・紹介され、初期フェミニストとしてのミーティヤード像は固まりつつある。しかしミーティヤードは、フェミニストという枠組みに収まりきれない作家であった。美術史の研究分野においては、ミーティヤードは主に、ウエッジウッド社の創設者ジョサイア・ウエッジウッド(Josiah Wedgwood)の伝記作者として、名を残している。ミーティヤードという多面性を持つジャーナリストの全体像をとらえることが、本研究の前提になる。

(2) ミーティヤードは、多作で、かつ幅広い分野に渡る執筆活動を行った作家であるが、その多くの著作が、徹底した取材や調査・研究を通して書かれている。ミーティヤードは、女性が政治・経済について話題にすることさえも厭わしいと見なすヴィクトリア朝社会において、女性であり、しかも重度の難聴を抱えた聴覚障がい者であるという、ジャーナリストとしての大きなハンディキャップを負っていた。それにもかかわらず、彼女が、19世紀半ばにありながら、むしろ現代のジャーナリストに近い取材や調査・研究方法を用いて、時代に先駆けた執筆を続けられた

のはなぜなのか、この問いに答えることが、本研究の目的である。

(3) より具体的には、本研究は以下の点を明らかにすることを目的とした。ヴィクトリア朝の厳しい性道徳ゆえに、女性が男性と一対一で会話することさえ許されなかった社会において、ミーティヤードはどのような人脈を用いて取材を行ったのか。多くの図書館が女性に政治雑誌・新聞の閲覧を許さなかった時代に、調査・研究のためにどのような情報源を利用したのか。ミドルクラスの真っ当な女性が金銭のために働くことを良しとしなかった社会において、どのように収入を確保していったのか。様々な社会的制約と困難にもかかわらず、激しい闘志をもって、社会のタブーに切り込んでいったのは、どのような思想をもっていたからなのか。そして、どのような社会的評価を得たのかという点である。

3. 研究の方法

(1) 研究の方法として、もっとも重要なのは、本研究着手の段階で作成中であったミーティヤードの著作リストにおける現物確認を進め、著作物およびその書評の複写を資料として収集し、その内容を調査することであった。それによって、ミーティヤードが著作物を上梓した出版社や、記事や連載小説を頻繁に寄稿した雑誌、ひいてはその編集者やミーティヤードと同じ雑誌に寄稿した文筆業仲間を確認し、彼らの回想記や自伝を、ミーティヤードの著作物の序文やあとがき、とくに謝辞と合わせて確認して、彼女の職業上の人脈をたどっていた。また彼女自身の著作を分析・考察するばかりでなく、書評によつての当時の社会が彼女の著作をどのように評価したのか、調査を進めていった。

(2) より具体的には、ミーティヤードが発表した作品ばかりでなく、その書評を、『19世紀連合王国定期刊行物』(19th Century UK Periodicals)など定期刊行物のデータベースを用いて、洗い出す手法をとった。1850年代以降にミーティヤードが寄稿したさまざまな雑誌の値段を確認し、とくに創刊号や新シリーズ冒頭に述べられた雑誌発行の主旨などを参照することで、雑誌の傾向を読み解いた。そしてそれぞれのミーティヤードの記事や連載小説から、彼女の主張だけではなく、その雑誌をなぜ寄稿先に選んだのか、またその雑誌に合わせて、どのように論を展開していったのか考察を進め、さらに一歩進めて、彼女の執筆内容から、どのような取材や調査を行ったのか推測する作業を行った。集めた書評からは、どの雑誌がミーティヤードの作品を書評に取り上げ、どのように評価しているのか、その傾向を調べていった。

4. 研究成果

(1) 本研究を始める以前に1840年代中頃から末にかけての著作活動についてはすでに調査を行っていたので、まず最初に、イライザ・ミーティヤードがその後、すなわち1840年代末から50年代初めにかけて寄稿した雑誌記事や連載小説に焦点を当てた。ミーティヤードはもともと政治・社会問題を扱う急進的ジャーナリストであったが、1840年代中頃に主な寄稿先であった「大衆向上雑誌」(大衆の知的・社会的向上を目指した雑誌ジャンル)全般の売り上げが伸びず、次々と廃刊になった後で、意に反して生活のために娯楽誌に寄稿せざるを得なくなった。それでも1840年代終盤から50年代初めにかけては、『イライザ・クック・マガジン』(Eliza Cook's Journal)や『労働者の友』(The Working Man's Friend)、『貧民学校ユニオン・マガジン』(The Ragged School Union Magazine)などに社会派の記事・小説を載せていたが、1840年代に、様々な社会問題を広く扱った「大衆向上雑誌」に寄稿していた時と違って、同じ社会問題を扱うにしても雑誌に合わせてテーマも書き方も変えている。

(2) 1850年代半ばになると、急進性を矯める傾向がさらに強まっていく。それだけではなく、ミーティヤードは『レディのおとも』(*The Ladies' Companion*)や『レディのキャビネット』(*The Ladies' Cabinet*)といった淑女向け雑誌に軽い読み物を書いたり、以前の記事や連載小説を使いまわしたりするようになる。当時は、女性の図書館の使用が制限されていたり、中産階級の独身女性が一對一で男性と話をすることがタブーであったりと、資料を閲覧するにもインタビューを行うにも、女性ジャーナリストにとって著しく不利な社会であった。そのような状況において、社会の向上のために役に立ちたいという高邁な理想を持ちながらも、生活のために意に染まぬ売文業を続けるしかなかった彼女には、もはや、それぞれの社会問題についてじっくりと取材や調査をする十分な時間が無かった。不利な状況と生活苦のなかで理想を曲げて生きていかざるを得ないミーティヤードのあり方を考察することは、19世紀英国の女性ジャーナリスト全般のあり方を知る上でも、また現代社会のジェンダーについての問題を鑑みる上でも有益であった。

(3) このように、1840年代に様々な社会問題について大衆向上雑誌に急進的な記事を寄稿していたミーティヤードは、50年代初頭までに大衆向上雑誌が次々に廃刊になると、生活の糧を得る目的で婦人向けファッション雑誌等に軽い読み物を寄稿せざるを得なくなった。1850年から60年代初頭にかけて、過労と困窮のなかで体調を崩した彼女は、繰り返しすなわち1851, 1854, 1859, 1862年に生活苦にあえぐ作家を支援する王立文学基金(Royal Literary Fund)に申請し、その都度経済的援助を得ている。しかしながら、1863年からは『オッド・フェロウズ・マガジン』(*The Odd Fellow's Magazine*)の常連寄稿者になり、生活が多少とも安定したように思われる。そこで彼女は、従来から計画していたウエッジウッド社の創始者の伝記『ジョサイア・ウエッジウッドの人生』(2 vols, 1865-66)の執筆に本腰を入れ、その出版により一躍時の人となり美術史にその名を残した。しかしながら、本書の出版後、経済状態が劇的に改善されることは無く、ミーティヤードは1868年に、王立基金に5度目の申請をしている。

(4) ジョサイア・ウエッジウッド(1730-95)が生きた時代は、英国で産業革命が進行中の時代であった。そのため、いまだ産業革命以前の価値観を引きづっていた同世代の人々、特に作家には、ジョサイアのような工場制機械工業の実業家の人生を記録する意味が十分に意識されていなかった。結果として、ジョサイア及びその工場に関する資料は四散することになった。女性の家庭外の活動が制限されていた時代であっただけに、女性ジャーナリスト、ミーティヤードのウエッジウッドの伝記作成は難航したであろうことが、推測される。

しかしながらミーティヤードは、出身地の人脈に加え、1840年代中ごろに大衆向上雑誌群に寄稿していた間に培ったユニテリアン急進派の人脈や、ユニテリアン急進派の人々が企画・運営したクラブであるホイットントン・クラブを通じてさらに広がった人脈などを利用して、資料を集めている。とくに幸運であったのは、リバプールのジョセフ・メイヤー(Joseph Mayor, 1803-86)との知己であった。ウエッジウッドの陶器に魅せられた彼は、自らウエッジウッドの伝記を書くつもりで、様々な関連資料を集めていたが、著作時間をとることができなかった。そこでメイヤーは、ミーティヤードに資料を貸し出し、伝記の作成を託したのである。またミーティヤードが、ウエッジウッドの孫にあたるチャールズ・ダーウィンと、同郷であったことも幸運であった。彼女はダーウィンから、ウエッジウッドの書簡を借りている。

ウエッジウッドの伝記作成のための、このようなミーティヤードの資料入手方法を辿る研究は、女性の社会領域における活動が極端に制限されていた時代において、人的ネットワークが、政治や社会、産業に関心を持つ女性ジャーナリストにとって、いかに重要であったかを示している。

(5) 前述のように、ジョサイア・ウエッジウッドが生きた時代に、彼のような大工業（工場制機械工業）の実業家の人生を記録する意義は、明確には意識されていなかった。しかしながら、死後約 70 年を経て、彼の人生は、ミーティヤードによって、「大工業の英雄」として、伝記に残されたのである。本研究では、ある人物の人生を伝記を残すに値すると考える社会の評価基準に注目しつつ、ミーティヤードが、ウエッジウッドを貧しく無学な家庭出身の人物であったという偏見を覆すために、様々な資料を駆使して、伝記文学というよりはむしろ現代の研究書に近い形をとって、「大工業の英雄」像を描いたことを明らかにした。また、現代のジャーナリズムを考える上でも、情報の真偽を精査する上で、何が情報源として残すべき資料であり、著作対象とするに足るテーマであるのか、社会常識がイデオロギーとして規定し得ることが明確にされた点で、本研究は有益であると言える。

(6) 『ジョサイア・ウエッジウッドの人生』は、陶器製造の審美的・技術的側面ばかりでなく、ウエッジウッド社の労使関係にまで踏み込んだ著作である。1840 年代の社会派の作家として活動した経験と、50 年代に婦人ファッション雑誌に寄稿した経験が、従来からの古美術品や生活工芸品への興味と相俟って、本書に結実したと言える。40 年代には急進的にすぎたミーティヤードであったが、不遇の 50 年代を経て、読者に分かりやすく、かつ反感を抱かせることなく社会問題を扱う記事を書く術を身に付け、古美術や生活工芸品の専門家として活路を見出し、ウエッジウッドの伝記作家として名を成したのである。そのような彼女の人生における著作業の軌跡からは、19 世紀英国のジャーナリズムや女性ジャーナリストのあり方だけではなく、現代のジャーナリズムにおける読者と作者の関係を考える上でも示唆的である。

(7) また、本研究に広がりを持たせるために、19 世紀の出版文化を象徴する作家と言えるハリエット・マーティノー（1802-76）とミーティヤードを比較することで、同時期ジャーナリズム業界におけるユニテリアンの出版者と著者等の知識人仲間のネットワーク及び読者との関係性を読み解く試みを行った。マーティノーは、ミーティヤードと同じく、ユニテリアンの精神土壌において進歩的な知性を育んだ女性ジャーナリストである。1840 年代後半から 50 年代初頭にかけて、2 人は同じ複数の雑誌に寄稿し、知識人サークルにおける共通の知人も多かったが、その後、2 人が著作物を発表・出版するあり方は、大きな違いを見せるようになった。この 2 人の作家の寄稿先を比較することで、ユニテリアンの人的ネットワークと雑誌の関係性について考察を行った。

(8) 本研究代表者は、研究成果をヴィクトリア朝研究学会や欧米言語文化学会のシンポジウムや、日本大学英文学会で発表し、加筆修正のうえ、雑誌論文や共著の図書として出版した。今後はこれらの成果を踏まえて、単行本としての出版を目指す予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 閑田 朋子	4. 巻 49
2. 論文標題 イラクサとギンギシ： ヴィクトリア朝急進派ジャーナリスト、イライザ・ミーティヤードが提唱する、花が導く救貧院改革	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 英米文化	6. 最初と最後の頁 31-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 閑田 朋子	4. 巻 17
2. 論文標題 ユグノーと英国織物産業：デザインにおけるイングリッシュネスの模索	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ヴィクトリア朝文化研究	6. 最初と最後の頁 27-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 閑田朋子
2. 発表標題 ミーティヤードが描いた「大工業の英雄」ジョサイア・ウエッジウッド
3. 学会等名 欧米言語文化学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 閑田朋子
2. 発表標題 Harriet MartineauとEliza Meteyard：ジャーナルと交差する人間関係
3. 学会等名 日本ヴィクトリア朝文化研究学会
4. 発表年 2022年

1．発表者名 閑田 朋子
2．発表標題 ギaskell・ミーティヤード・ディケンズ
3．学会等名 ディケンズ・フェロウシップ日本支部、日本オスカー・ワイルド協会、日本ギaskell協会、日本ジョージ・エリオット協会、日本ハーディ協会、19世紀イギリス文学合同研究準備大会
4．発表年 2021年

1．発表者名 閑田 朋子
2．発表標題 硬派な作家イライザ・ミーティヤードのご婦人(レディ)向け軽い読み物の執筆
3．学会等名 日本大学英文学会
4．発表年 2020年

〔図書〕 計1件	
1．著者名 吉田一穂、閑田 朋子、藤田晃代、小林佳寿、高坂（本村）徳子、深谷格、山内圭、浅野献一、横山孝一、伊藤由紀子、藤原愛	4．発行年 2024年
2．出版社 音羽書房鶴見書店 （印刷中）	5．総ページ数 -
3．書名 人種と民族を考える十二章 - 英米文学・文化・教育の視点から	

〔産業財産権〕
〔その他〕

6．研究組織			
	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会
〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況	
共同研究相手国	相手方研究機関